

[学術論文]

沖縄学と郷土研究

—戦前の沖縄学・郷土研究が内包した矛盾と葛藤—

The Study of OKINAWA and Japanese Folklore

阪井芳貴

Yoshiki SAKAI

Studies in Humanities and Cultures

No. 26

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 26号

2016年6月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JUNE 2016

〔学術論文〕

沖縄学と郷土研究

―戦前の沖縄学・郷土研究が内包した矛盾と葛藤

阪井 芳貴

はじめに

戦後の沖縄学をリードし続けてこられた外間守善氏が、本稿執筆のさなかの11月20日に亡くなられた。(注1)今年、3月末に東京で大規模な沖縄学シンポジウムが開催され、これまでの沖縄学の足どりを確認し、これからの沖縄学の見通しを多くの研究者が見つつけようとする集い、さらに8月には那覇でも、沖縄学の過去と未来を探るシンポジウムが開かれたのであったが、外間氏はこうした沖縄学をめぐる動きをどのように見ておられたのであろうか。

外間氏は、当然、常に「沖縄学の父」伊波普猷を意識して研究や後進の指導を続けてこられたと推測する。その結果、学界からも社会からも伊波の後継者として評価されてきた。その伊波普猷の開拓したこの学の世界について、実はまだまだ明らかになっていないことが多々ある。その明らかになっていないことがらのなかには、沖縄の人々にとつて、郷土の学問である沖縄学とはどのような学問であったのか、どのように受け止められてきたのか、それがどのように拡がっていったのか、という根本的なこともたくさんある。

本稿は、それらについてひとつの解を示し、沖縄学の萌芽から発展に至る過程について検討する材料を提示しようとするものである。

キーワード

近代沖縄・沖縄学・郷土研究・郷土教育・折口信夫

要旨

伊波普猷を「父」としてきた「沖縄学」を再評価し、その足取りと未来を探る動きが盛んになっている。本稿は、その「沖縄学」が確立した戦前の沖縄における教育界で、時代の要請により重視されてゆく郷土教育・郷土研究と沖縄学との間で矛盾・葛藤を抱えることになる教員たちの言説をもとに、沖縄学がどのように受け止められていくのかを明らかにしようとしたものである。あわせて、「沖縄学」を折口信夫の独特の学問世界を構成する「折口名彙」として位置づけようとする試みる。

日本民俗学を導き、本格的な学問に築き上げようとしていた柳田國男にとって、1921年のいわゆる海南小記の旅は、その学問の道筋を大きく変えるほどのインパクトを与えた。後に、柳田はこの旅で得た収穫を次のように述べている。

我々の学問にとって沖繩の発見は画期的の大事件であった。（中略）（言語・信仰などが）いずれもみな沖繩を日本の古い分家と心づくまでは全然参照し得なかつた新資料のみであつた。（中略）沖繩研究の間接なる恩恵は幾つかあるが、（中略）ぜひとも比較によつて民族全体の古代を映発するために、一日も早く各自の郷土研究を進める必要があるということを、新しい歴史学に教えてくれたのである。（「郷土生活の研究法」1935年）

ここで柳田が「古い分家」と表現したのは、日本民俗学における日琉同祖という言説の嚆矢としてもよいであろう。その見聞談を自宅で聴いた折口信夫は、それを自分の眼で確かめずにおれなくなり、半年遅れの同年夏に沖繩に旅立つ。折口信夫の感性が沖繩で捉えたのは、柳田よりも距離感を縮めた日琉の關係であつた。

沖繩本島を中心とした沖繩県の島々及び、其北に散在する若干の他府県の島々は、日本民族の會て持つてゐた、最も古い生活様式を、最も古い姿において伝へる血の濃い兄弟の現に居る土地である。

（「沖繩を憶ふ」1946年）

折口は、その翌々年と1935年から36年にかけての、計三回沖繩に渡り、独自の理論である「まれびと論」を確立し、また琉球古典芸能のヤマトへの紹介に尽力するなど、沖繩への思いを終生持ち続けることになる。

この2人の民俗学の泰斗の沖繩研究に刺激を与え、また2人から支えられたのが伊波普猷であつた。伊波が、後に「沖繩学の父」と呼ばれるに至るには、この2人の存在が欠かせなかつたと思われるが、伊波・柳田・折口の創り上げた沖繩学が進展してゆくのと並行し、沖繩では急速な日本化・同化が推進されていた。いわゆる皇民化であるが、とくに沖繩県設置後ただちに全県的に整備される学校を拠点とする皇民化教育が、そこで大きな役割を果たしていく。その背景には、県民による早く日本人にならねばならぬという内的希求と、アジア進出の足がかりの確立と周辺諸地域支配の先駆例を求める政府による外的要因とが働いていたのであり、そこに教員たちが関与することになるのは当然の帰結であつた。

たとえば、「沖繩教育」第76号（1912年）には次のような発言が見られる。

我沖繩はこれまで内地府県の人より、一般我国の世の中より骨と骨と物扱ひをされて居た。今後お互いに充分に奮励努力して一日も早く内地同様当り前の程度に進まねばならぬ。

（「島尻郡部会に於ける島内事務官の演説大意」）

ここには明らかに、ヤマトへの劣等意識を持つ沖縄人をして他府県人と同等の知識・生活レベルに引き上げなければならぬという一種悲壮な決意が読み取れる。おそらく、こうした意識を多くの教員たちが共有して(させられて)いたのであろう。標準語教育に象徴される同化教育・皇民化教育は、そうした教員たちによって、昭和戦前期まで強力に押し進められていくのであった。

いっぽうで、同誌第75号には、次のような記述も見える。

沖縄教育目下努力研究すべきこと二つある。第一郷土の研究、第二児童の研究とである。郷土の研究を看過せる為其自身の住む郷土の事情を明察していない為に、一方においては其欠点がひいては沖縄県を他に紹介することができない。依て沖縄県が他の辺隔なる地よりも他に知られて居ない。

(廣川鐵蔵「手土産(其の一)」)

これは、ヤマトに沖縄理解を深めてもらうには、まず自ら沖縄のことを知らなければならぬ、という議論である。内発的な関心からのものではなく、沖縄についての知識を深め、そのポジションを高めてもらうための方策としての郷土研究が推奨されたのであった。

そうした立場と連動するの、あるいは純粹に琉球・沖縄史の再確認の試みであろうか、この時期の同誌には王朝時代の古文書(例『中山世譜』)の翻刻なども連載されている。

琉球処分・沖縄県設置から大正期までは、このような教育界の大き

な流れが社会全体をも支配していたと考えられる。伊波普猷の沖縄県立図書館長時代は、まさにその時代であったが、そうであるがゆえに、伊波は『古琉球』に見られるように、内発的関心を喚起すべく、古代から前近代に至る琉球史ならびに琉球独特の言語・民俗・芸能などの文化事象についての考察を深めていったとも言えよう。それは、県内各地での講演・啓蒙活動にも通じる姿勢であったと考えられる。しかし、その成果は日琉同祖論としてひとくくりになされ、結局は同化・皇民化の推進に利用されたという側面は否めない。そこには、後述する矛盾と葛藤が存したものと考えられる。そして、その矛盾と葛藤は、伊波や柳田・折口に導かれるように郷土研究に携わった沖縄在住の研究者たちにこそ重くのしかかることになるのであった。

二

1912年に「郷土の研究」が、ヤマトに沖縄を知らしめるために必要だとの言説があったことは前述した。この「郷土」という言葉が、戦前の沖縄の思想・教育において極めて重要な術語であるのではないかということについて、これまで言及されたことはなかった。

柳田國男が日本民俗学を学として立ち上げた、その発足点は1910年の郷土会という研究会の創設と1913年の「郷土研究」という雑誌の発刊にあった。この郷土会のメンバーには、後述する戦前の郷土教育の推進者となる小田内通敏もいた。そのことは、柳田の民俗

学と後の文部省主導による郷土教育・郷土研究とが、同じ根から成長したことを物語り、興味深い。柳田にとつての郷土研究は、前掲のように「比較によって民族全体の古代を映発するため」のものであつて、その中で比較する材料として最重視されたのが沖繩であつたのである。柳田が「沖繩の発見は画期的なできごとであつた」としたのも、そこに所以がある。

折口信夫にとつての郷土研究も同様で、「日本人の古い相を知る為の郷土研究だつた」（1935年「民俗研究の意義」）であり、その沖繩への眼差しもまさに「古代」（＝折口名彙としての）を追究するためのフィルターの意味を有していたのであつた。その折口の沖繩探訪の旅は、大正期の二度は自身の学問を深め、新たな展開をもたらすものとなつたのであつたが、昭和にはいつての三度目の旅は、沖繩の教員たちの招聘により実現したもので、過去二度とは異なり、折口が沖繩の知識人たちに大きな影響を及ぼす旅となつた。折口は沖繩に渡るたびに、教員や地域の有力者、ジャーナリストなどの知識人、そして神女など、さまざまな立場の人々から聴き取りをおこなつていたが、そうした人々との交流から、単に学問上の収穫のみならず、より深いところで沖繩を理解する手がかりを得たものと思われる。そして、それは沖繩の人々にとつても同じであつた。その三度目の旅の始め、1935年12月20日に那覇に着いた折口は新聞記者の取材に答えて、次のように語っている。

東京の伊波さんとはしばしば会つてみますが益々熱心に研究して

居られる様です。もう今では沖繩学では世界的な学者といつてもいいでせう。

（紙名不詳 1935年12月21日付の新聞 清川安彦
新聞スクラップより）

この折口の発言中にある「沖繩学」に記者は傍点を付けている。おそらく、記者はこの耳慣れない言葉に何かしら重要性を感じ、読者にもそれを伝えるべく、強調のために傍点を付したのであろう。

この「沖繩学」は、直接的には折口の伊波普猷賞賛の言辞として、その学の大きさを表すために「世界的」という形容詞を伴つて使われているのであるが、これは、単に伊波の学問というにとどまらず、沖繩を研究することが学問上世界的な意義のあることを折口は訴えようとしたのではないか。そして重要なことは、管見の限りでは「沖繩学」という術語が世の中に示された、これが初出例なのである。明治から昭和戦前期の資料がほんの断片的にしか残っていない現状では、この折口の発言が初出であると断定することには慎重でなければならぬが、これ以前に他の研究者などに使われていた形跡が見られず、また上述のようにここでの表記に傍点が付されていることから、現時点では、折口信夫によつて使い始められた語であるとしておいてよいように感じられる。「沖繩学」が、仮に折口による造語であり、これが初出であるとするならば、折口研究の立場からは、この語を「折口名彙」として認定すべきであると考えられる。そして、その概念としては、単なる沖繩研究ではなく、それが学として拡がり、普遍性・科学性が

認められ、隣接する学問と関わり合いながら、沖繩と日本の文化全般を追究する上で他の領域の学問と比肩しうる意義を有する学問、としておきたい。ちなみに、従来は「沖繩学」の初出を伊波普猷の『古琉球』改版（1942年刊）であるとしてきたが、それを数年遡るのと、

折口が伊波を評価する言辭において使われたということが、あらためて伊波折口の学問上の信頼関係があつてこそ「沖繩学」であつただと思わずにいられない。また、この新聞記事を読んだ県民が、この語をどのように受け止めたのか、それを想像することは難しいが、相応のインパクトを与えたのではないかと考えられる。というのは、この発言のタイミングに注目しておきたいからであるが、それについては後述する。

さて、このように伊波・折口によって切り開かれた「沖繩学」を担う人々には、同世代に東恩納寛惇・末吉安恭・真境名安興・島袋源一郎・島袋全発・喜舎場永珣ら、その次の世代に比嘉春潮・金城朝永・宮良當壯・仲原善忠・島袋源七といった人々を挙げることができるが、これら個人全集などが編纂されているような人々のほかに、学校の教員たちを中心として、広い裾野に及ぶのが「沖繩学」の特徴とも言える。 「沖繩教育」など教育界で発行された雑誌などを見ると、多くの教員たちが沖繩のさまざまな分野にわたる研究を深めていたことが認められる。従来あまり注目されてこなかった彼らの研究の成果に今後注目しなければ、戦前の沖繩学の全体像は明らかにできないのであるが、いっぽうで教育現場において彼らが同化教育と郷土教育との

ざままで困惑し葛藤していたことにも注目しておきたい。

三

1927年文部省は全国の教育現場に郷土教育運動を推進し始める。これより前、大正期には、画一的教育を打破するため、各教科においてできるかぎり郷土の資料を利用し、郷土の理解を深め、郷土を愛し、郷土の発展させることを目的に「教育の郷土化」が提唱されていた。それを踏まえながら、新たな運動として、師範学校を中心に郷土教育推進のための施策を打ち出したのであった。その結果、多くの学校に「郷土科」「郷土室」などが設置され、カリキュラムも改訂されていった。1930年に発足した郷土教育連盟がそこに果たした役割も見逃せない。この連盟において、柳田國男の郷土会に参加していた小田内通敏が中心的存在であったこともまた興味深い。小田内は、郷土の特性や個性を追求することを郷土研究（小田内にとっては人文地理学）の眼目にしてきたとされ、「郷土」「郷土科学」「郷土教育」といった機関誌を発行して、その活動を広めていった。その目的は、地方の生活の向上、郷土理解から郷土愛の涵養というところにあった。彼らのスタンスは文部省の掲げた施策と微妙な違いを抱えながらも、国の方針を支えていくことになる。その国の方針とは、郷土理解・郷土愛から愛国心・国民精神の醸成に向けられていた。それを受けて、沖繩県内でも、郷土教育のありかたについて、多くの教員が検討と実

践に携わっていく。たとえば、「沖繩教育」第174号（1929年）に収載された下地尋常小学校の幸地恵勇の「郷土教育に就いて」には、次のようにある。

（真の郷土教育の目的は）一定の土地の上についた歴史、祖先の事業を考察せしめて社会的感情を教養し郷土愛の幼芽を純真に成長せしめ（中略）その郷土愛は必然郷土をよく理解して国家全体に対する各方面の地位を知り郷土を如何に改善し如何に経営して国家の進展に貢献すべきかといふことを自覚させる（以下略）

昭和初期には、このような、郷土教育にどのように向き合うのか、実際にどのような事をすればよいのか、といった内容の論考が多数見られる。それは、とりもなおさず、それまでの同化教育・皇民化教育とは正反対ともとれる方針への戸惑いを反映したものと見て良いであろう。たとえば、「沖繩教育」第188号（1931年）収載の「沖繩の国史教育に対する私見」で女子師範学校の直田昇は、沖繩の国史における位置は微々たるもので、沖繩は国史の舞台から除外されていると指摘した上で、これまでの教育思想は「地方的色彩を無視し一も二も国家的普遍的色彩にのみ染め出さうとした」と断じつつも、郷土史教育に偏重するとその結果は恐るべきものになるとし、

郷土史教育は国民を創るの根底に於て是非ともその洗礼を施さねばならぬ。而し乍らその洗礼の程度は何処までも国民を創る事を目的としての予備であり段階でなければならぬ。（中略）当沖繩に於ては郷土史教育の絶対的が必要が存在する。（中略）国史を中

心として郷土史を併述して行くのが最も妥当なる行き方であると信ずる。

と述べている。ここには、具体的に教育現場でどのように郷土教育と同化教育の折り合いを付けるか、大きな悩み、逡巡が存したことが伺えるのである。

こうした教員たちの戸惑いを踏まえてであろう、文部省の役人による講話の類も「沖繩教育」には掲載される。たとえば、193号（1932年）の篠原普通学務局長による「師範教育と小学校教育との関係」には次のようにある。

（郷土教育は）始めに於ては、地理、歴史、理科の教授の出発点を郷土的材料に依つて、教育の實際化を計らんとする精神に於て、提唱せられたものである。（中略）後に至つて、郷土教育には更に重大なる任務の負はさるるに至つた。即ち郷土に対する理解を与へることに依つて愛郷心を培い、この愛郷心を、更に愛国心の基本たらしめんとするこれである。これに依れば、郷土の自然、人事を知らしむると共に、町村と自分との依属関係を理解せしむることは、やがて国家と個人との関係の理解に役立つものであると考へるのである。

このように明確に郷土理解・郷土愛の涵養をもつて愛国心に結びつけるという思想が示されるに至り、教員間にもそれが定着してゆく。第195号（1932年）収載の女子師範学校附属小学校の町田辰巳の「郷土教育の視点」には、

(郷土教育の目的は)偉大なる国家愛へも発展してゆくべき郷土愛の養成にある(中略)郷土の認識は、児童の人格の発展と共に拡大してゆくものであつて、やがてはより大なる郷土日本国土の偽らざる姿への認識ともなる(中略)即ち郷土教育は知、情、意の三方面を持てる一つの目的に向かつての教育でなければならぬ。(中略)今や郷土教育は教育の地方化實際化の重要な一方法であるばかりでなく、愛郷心を培い愛国心の源泉たらしめんとする新使命を加へ益々重要性を帯びるやうになつた。

とあり、郷土教育が単に地域を理解するためのものではなく、国家を価値観の中心に据えるための教育に組み込まれていくことを如実に示している。こうして、実際の初等教育、さらには実務教育における教育カリキュラムにも郷土教育が導入され、その実践のために、教員による郷土研究も盛んになっていくのであつた。そうした動きに連動して、副読本や年表などの資料類も編集・刊行され、「郷土」を冠した雑誌や資料類が出来るようになるなど、1930年代前半は、同化教育Ⅱ郷土教育という構図の確立、そしてその基盤となる郷土研究のひとつのピークを迎えるのであつた。

その郷土研究においては、1927年に沖縄県教育会の主導により真境名安興県立図書館長を代表とする沖縄郷土研究会が設立されたのであつたが、この会は「愛郷心を育て、もつて愛国心を培う」ことを目的としたものだったようであるから、まさに上記郷土教育を研究面から支える役割を担っていたと言えよう。その後、1931年には郷

土史同好者、郷土研究に興味を有する人々を集め、やはり真境名安興を中心に据えた「郷土研究座談会」が発足する。「沖縄教育」第187号(1931年)の巻頭言はその意義について言及しているし、例会について同誌上でその報告が掲載されるなど、この座談会も教育界と密接な関係を持つ。また、その後の沖縄県文化協会や沖縄郷土協会の創立、そして郷土博物館の開館へと向かう一連の動きは、教育界における郷土教育の展開と軌を一にしている。もちろん、これらの会や博物館にも教員たちが多く参画しているので、それは当然ではあるが、いっぽうで教育と研究とは立場の相違も見られた。それは、郷土研究が沖縄の文化の真価が認められることに寄与し「先祖ノタメニ誇リトスベキ」成果をもたらしたと真境名が指摘したように、郷土研究と愛国心を涵養するための郷土教育とのスタンスの違いに収斂していくのではないかと考えられる。

四

前節で指摘したように、沖縄県内の郷土教育と郷土研究は1930年代前半に一つのピークを迎える。それは、「沖縄教育」の特集に見ることが出来る。現存が確認されている同誌の内容によれば、1933年1月発行の198号から同年9月発行の205号まで、島袋源一郎が編集を担当している。206号から2013号までは現存しないので判然としないが、この島袋が編集した時期に立て続けに大特集が

組まれている。198号は昭和会館落成記念、199号は郷土史特輯号、200号は国語特輯号という具合で、特に後二者はそれまでにな

い120頁を超える分量であった。この島袋源一郎は、戦前の沖縄教育界の第一人者であり、1919年にはひとり『沖縄県国頭郡志』を著すなど郷土研究においても沖縄在住の研究者たちの中心人物であったし、折口信夫がもつとも信頼した人物でもあった。その島袋が、上記特集を次々に企画したのは、この時期が沖縄の郷土教育と郷土研究において重要な時期であったことを認識していたからであろう。昭和会館は沖縄教育会の拠点として建設された建物であったが、そこには後の郷土博物館の前身といふべき教育参考館が設置された。この参考館の設置と運営に島袋は大いに貢献したのであるが、彼はこれを、琉球・沖縄文化の貴重な文物の散逸の危機を防ぎ、収集・保存・公開する場、すなわち郷土研究の一拠点となるべき施設として考えていた。が、その名称を沖縄県教育会の財産として郷土教育に資する「教育参考館」としたことについては、今後考察すべき点があるように感じる。島袋は、この教育参考館を博物館に発展させるため、この後「沖縄教育」誌上に収蔵品目録を連載するなど、さらに働きかけを強めていくのであった。そこには、郷土研究の充実発展への大いなる期待と希望を見ることができよう。昭和会館落成記念特集には、そうした島袋の思いが込められていたのである。

その次の、郷土史特集号には、郷土研究のあり方に関連し、大変興味深い言説を見いだすことができる。まず巻頭に東恩納寛惇の講演「本

県郷土史の取扱に就いて」の筆記録が載っているが、ここで東恩納は次のように述べている。

沖縄の郷土史と琉球史とは全然別々のものであることを注意されたい。（中略）琉球史は向象賢以後に組み立てられたもので（中略）王国としての変遷を書いたものである。然しながら郷土史は、国史の一部分であつて、従つてその教授によつて、期する所の目的及結果は、全体のそれと抵触してはならない筈である。（中略）国史教育の目的を成しとげると言ふ事が、郷土史教授の任務であらねばならぬ。国史教育の目的は言ふまでもなく国民性の涵養である。

ここで東恩納は、郷土教育が目指すところに関わる郷土研究としての郷土史と琉球王国史とを切り離し。後者は国史とは別のものとして扱うことを提唱したのである。伊波のライバルである東恩納にとつて、その研究対象である琉球王国史を国史ならびに郷土教育とリンクする郷土史と切り離すことで、自らの研究における自由度を確保するねらいがあつたのかもしれない。この発言が、どのように受け止められたのか確かめようがないが、実際にこの郷土史特集号においては、極めて大胆な同化教育からの脱却を謳う言説まで掲載されている。第三中学校の豊川善暉の「魂のルネッサンス」がそれである。豊川は、「沖縄郷土史教授の骨子は何かときかれましたら私は「魂の振興である」と答へたい。薩摩入以来抑へつけられて萎縮してゐた吾々の民族魂を解放して元の通り元氣よく活動させるにあると云ひたい。」として、次の

ように述べている。

同化政策の爲めに取られた精神的重圧は旧藩時代に於けると同様に吾々魂を抑へつけて活発な活動をなさしめなかつた。極度の画一制度、中央文化に対する過度の賛美と、固有文物に対する過度の卑下、或は県民に対する各種の差別待遇などは吾々の精神を一層萎縮させて、自分等はつまらない者、見棄てられた者といふ感を強く抱かせた。この感じはあらゆる方面に希望を失はせ、努力を失はしめた。(中略)吾々は斯ういふ気分を一掃して心の奥底から魂の改造をはからなければならぬ。之をなすには唯郷土史を振興し民族的認識不足を充たすより外はない。(中略)本県を振興させるにも古琉球の文藝復興の力をからねばならない。述懐時代の哀調を一掃してオモロ時代の朗らかな気分を復興しなければならぬ。さうするには古琉球の文化を研究しなければならぬ。(中略)吾々の祖先はこれ迄縁の下の力持となりて暗々に日本文化に貢献して来たのである。決して今日の如き無為無能の他力本願人種ではなかつたのである。然るに今日の状態は如何。澁刺たる往事の面影は何処にかある。これ皆同化々々といつて角を矯めて民族魂を殺した爲めである。廃藩置県以後の本県統治は政策の誤謬からである。(中略)郷土史は吾々の失はれた精神を喚び起して自力更生の力とならしめるものである。

一種のナショナルリズム喚起の檄文のようにも感じられる文章であり、ここまで同化政策を批判したものはあまりないように感じるが、しか

し少なからぬ県民が内心このような思いを抱いていたことは充分想像できる。教育界のリーダーでもあつた島袋源一郎でさえ、「沖繩教育」第205号の巻頭言で次のように語っているくらいである。

今日喫緊の大問題、否根本問題は実に剛健にして偉大なりし祖先の気魂を甦生することではなければならぬ。(中略)此等の活躍せる偉人や種族繁栄の爲めに貢献せし人々の業績を顕彰することが焦眉の急務ではあるまいか。(中略)猶ほ文化協会に於ては一方郷土博物館建設の急務を唱道し、速に県立図書館の移転拡張と共に之を断行すべきを絶叫してゐる。是れ亦吾等の祖先が遺した文化を永遠に伝へて県民の発奮を促さんとの意志に基づくもので、(以下略)

こうした立場と連動していると考えられる陳情が1933年8月22日におこなわれていることも注目に値する。それは、尚家文書の公開に関する陳情である。右の巻頭言を載せる「沖繩教育」第205号にその陳情書が「雑纂」の中に収録されている。そこには、「日本本土同化思想に禍せられて」旧家の文物が散逸してしまつたことを問題視し、伊波普猷が県立図書館で琉球王国時代の古文書等を収集してきた実績と意義を挙げて、尚家に対し「御所蔵の郷土文献書類絵画面等を公開して広く内外一般郷土研究者に利用せしめられむことを」陳情するとある。陳情者は沖繩県初等教育研究会代表陳情委員として、師範学校と各中学校の校長、小学校長協会長、それに沖繩県教育主事島袋源一郎が名前を連ねている。こうした動き、そして同化政策への

批判が教育現場の長たちの総意として出されていること、また、それが郷土研究の発展のためと謳われていることは注目すべきである。

こうした例から伺えるように、折口がいうところの沖繩学に携わる多くの人々が実は、研究を深めれば深めるほど、琉球・沖繩のアイデンティティを自覚し、同化教育＝郷土教育という枠組みに対し矛盾と葛藤を抱くようになっていたと思われるのである。

五

1935年12月に三度目の来県をはたした折口信夫は、先に紹介した新聞記者のインタビューの中で次のような発言をしている。

民族学が盛んになったのは新しく故郷を省て先祖の生活を知る事にあるのですが、これによつて具体的に故郷の有りがたさを知り正しい生活に向つてゆく方針も決まる訳です。

（「民族学」という漢字表記は原文のまま）

前節で見た郷土研究のスタンスを易しく語っているように感じられるが、この三度目の折口の来県は沖繩の知識人たちに多大の影響を与えた。それは、前二回とは異なり、沖繩在住の國學院の教え子たちを中心とする教育会のメンバーによる招聘での来県であり、各地で講習会や講演をおこなったことによる。その主たる講習会は国語研究会がセッティングした万葉集の講習会であったが、その他に沖繩の宗教・信仰に関する講演などもおこなわれ、その筆録が新聞紙上や「沖繩教

育」に掲載された。名護で教員をしていた宮城真治や知念村在住の新垣孫一、それに島袋源一郎が、その発言に大いに刺激を受けたことが、後日の彼らの言説により確認できる。宮城は、沖繩の御嶽とヤマトの神社の関係に特に関心を持ったようで、数年後に県議会議員としての議会における質問にもその影響が現れていた。また、新垣と島袋もそれぞれ沖繩の宗教について言及した際に、折口の考えを踏まえた発言をしている。ただ、彼らが必ずしも折口の真意を汲み取れていなかったことは、その発言内容から明らかであった。それは、とりもなおさず、同化と反同化との折り合いのつけ方の難しさに起因していた。そこに、戦前の沖繩における郷土研究と沖繩学との微妙かつ重要な差違を見ることのできるのであるが、折口自身も、同化を至上命題と課せられつつ沖繩文化の研究を深化させたいと願う沖繩の研究者たちに、どのように向き合えばよいのか、少なからず迷いがあったことは指摘しておかねばならないが、それについては別に考察することにする。

さて、折口だけでなく、ヤマトから来訪した研究者・言論人などの発言の影響は決して小さくはなかったと思われる。もちろん、河上肇の舌禍事件、柳宗悦の発言に端を発する方言論争などに見られたように、沖繩の独自性を評価する発言がかえって反発を招いてしまった例もあるが、おおかたの、琉球・沖繩文化が有する独自の芸術性を高く評価し賛美した来訪者たちの発言は、多くの場合、沖繩の知識人たちのアイデンティティの自覚を促す結果となった。それは、たとえば伊東忠太の評価が首里城の保存・修復につながって、県民の誇りを回復

するに至ったといったことから明らかである。また、折口信夫が三回目の来県時に発案した琉球古典芸能大会の東京公演の実現（1936年）が、沖縄の芸能の洗練された芸術性をヤマトの知識人・芸術家たちに強烈な印象を伴って知らしめたと同時に、沖縄の芸能者や知識人に自信を植え付けたという意味でも大変意義深い機会となったことも、特筆すべきであろう。この公演の直後に刊行された「沖縄教育」第239号の表紙には組踊「銘苜子」の舞台写真が使われている。こうした表紙は、現存する号では極めて珍しいのであり、それだけこの東京公演がもたらしたインパクトの大きさを物語っている。

このように、県外からの来訪者の影響をも抱え込まざるを得なかった結果、1930年代は郷土教育と郷土研究がそのピークを迎えるとともに、そこに関わる教員を始めとする知識人たちに、同化と反同化、日本化と郷土化、といった相反する方向の双方への深化を求める時代となった。彼らは矛盾と葛藤をその教育活動および研究活動に内在させなければならなくなったのであった。

その遠因には、柳田・折口が推進した民俗学ならびにそれに隣接する郷土教育と、国家が主導した郷土教育とそれと軌を一にした郷土研究との間に本質的な違いがあることを沖縄の教員たちが把握し得なかったことを指摘しなければならない。が、それは無理からぬことであつた。折口自身の説明は次のようである。

我々は、民俗学といふ語を用ゐる前は、郷土研究と言つてゐたのであるが、近年、此語を用ゐるのが都合が悪くなつた。我々の用

ゐた郷土と、最近一般に謂はれてゐる郷土とは、意味が違ふのである。即、我々の郷土研究は、誰某の郷土、我が郷土などといふ、狭い意味の郷土の研究ではなく、其を通り越した、我々の過去、即、日本人の古い相を知る為の郷土研究だったので、郷土と研究とがくつゝいたものであつたのだが、残念な事には其が再、逆転して、狭い意味の郷土を考へる様になり、更に近頃は、其に対して歴史的な考へ方をする様にさへなつた。最近の郷土教育・郷土研究が其である。謂はゞ、かうした人達には、言葉の進化といふ事がないとも見られる。また、言葉の意義を無視して、無制限に広げた結果だとも見られる。とにかく、最近の郷土研究なるものは、一地方だけに対する知識・殊にその歴史をいふのであるが、我々の用ゐた郷土研究は、歴史をもつて考へ切れないものを、各地に残存してゐるものゝ比較によつて究めようとするのであるから、大きな違ひである。（「民俗研究の意義」1935年）

歴史の大きな流れの中で、沖縄の教員・知識人たちによる郷土研究の多くは、国家主導の愛国心発揚のための郷土教育に自らを組み込み、折口言うところの狭い意味の郷土研究にとどまり、伊波が導き折口が命名した「沖縄学」とは一線を画すものとなつてしまつたのであつた。その結果、前述のように、愛国心発揚とアイデンティティの高揚とのほぎまで、矛盾と葛藤が生じ、それを内包したまま1940年代に入り、やがてそれらは雲散霧消の結末を迎えるのであつた。

おわりに

ここまで、戦前の沖縄学の実相を明らかにするためには、「郷土」という術語の受け止め方を追究することが重要であることを述べてきた。だが、残念なことに、近代沖縄を知る手がかりとなる資料は断片的にしか残っており、そのことが研究の大きな妨げになってきた。が、徐々にではあるが研究の進展を促す資料の発掘や復刻が進められている。本稿においても、「沖縄教育」の復刻版刊行により多大の恩恵を被ることができた。研究が進展すれば、また資料の発掘に可能性が広がる。そうした良い循環が今後も続くこと、そして、折口名彙「沖縄学」が1930年代から今日までたどってきた経緯を確認することで、沖縄学の過去・現在・未来の把握ができるようになることを願っている。本稿は、その小さなステップと位置付けたい。

注

- 1 外間守善氏が亡くなられたのは2012年の11月であり、本文中にある「今年」も2012年である。本論文は、同年12月に脱稿したが、諸事情により本論文が収載される予定だった本の刊行が中止となったため公開されなかったもので、本紀要に投稿したものである。

- 2 本論文は、2012年3月31日に早稲田大学で開かれた「復

帰40年沖縄国際シンポジウム これまでの沖縄学 これからの沖縄学」三日目のパネルセッション「同化」をめぐる研究のこれまでとこれから」における報告と、同年8月12日に沖縄県立博物館美術館で開かれた「琉球大学国際沖縄研究所シンポジウム」沖縄学を問い直す―過去・現在・未来へ―二日目の報告「沖縄学と郷土研究と―折口信夫から島袋源一郎まで」をもとに成稿したものである。

- 3 本論文中の「沖縄教育」からの引用は、不二出版による復刻版（2009年〜2012年）によった。また、折口信夫・柳田國男の文章も、それぞれの全集（最新版）に収載のテキストに依った。

参考文献

- 1 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』1998年 思文閣出版